



長野県No.1のもも・ネクタリン産地を守ろう！

◆生育状況と当面する重点作業について

生育は、昨年より4日程度遅い生育状況。今後の気象で変化するので作業が遅れないよう注意する。

1. せん孔細菌病の枝病斑が見受けられる。摘果と併せ病斑の切除を徹底する。また、5月は降雨や強風が多く、感染拡大が心配されるため、果実の確認をしながら摘果するとともに、薬剤散布を徹底する。
2. 硬核期となり、生理的に不安定な時期となる。核障害の低減のため、急激な摘果・新梢管理にならぬよう十分注意する。
3. 袋掛けを行う。併せて誘引・芽かき・摘心を励行する。
4. 無袋栽培園では摘果忘れ等で部分的に着果過多になりやすい。定期的に見直し摘果を行う。
5. この時期は平年並みの降水量でも水分が不足する可能性がある為、こまめにかん水を実施する。なお、大量のかん水は核割れを助長するので、乾湿差を少なくするよう小まめに実施する。干天が続いたら10日位に20mm程度、又は7日位に15mm程度のかん水を行なう。
6. 配布されている「葉面散布肥料・特殊資材の使い方」を参考に葉面散布資材を有効に活用する。

【もも薬剤防除】

◆第7回薬剤散布について

1. 散布時期:6月7日(土)~11日(水) 《実際散布日記入 月 日》
2. 調合量:水100ℓ当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病虫害	収穫前
固着性展着剤アピオンE	66ml	—	—
トレノックスフロアブル	200ml	黒星病	7日前
エクシレルSE	20ml	モモハモグリガ・シンクイムシ類・ハマキムシ類	前日
マイコシールド	66g	せん孔細菌病	21日前

3. 留意事項
①マイコシールドは収穫前日数が長いため、収穫時期の近い早生種は④デランフロアブル 600倍(水100ℓに166ml・もも7日前)に代えて散布する。

【ネクタリン薬剤防除】 ※もも・ネクタリン混植園

◆第7回薬剤散布について

1. 散布時期:6月7日(土)~11日(水) 《実際散布日記入 月 日》
2. 調合量:水100ℓ当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病虫害	収穫前
展着剤	10ml	—	—
④デランフロアブル	166ml	黒星病	14日前
エクシレルSE	20ml	モモハモグリガ・シンクイムシ類・ハマキムシ類	前日
(マイコシールド)	66g	せん孔細菌病	28日前

3. 留意事項
①せん孔細菌病の発生が多い場合は、マイコシールド 1,500倍(水100ℓ当り66g)を加用散布する。ただし、収穫前日数が長いので、収穫時期の近い早生種への散布はできないので注意する。

【第7回薬剤散布もも・ネクタリン薬剤防除共通】

1. 散布量: 10a当り⇒500ℓ以上

2. 散布上の留意事項

①袋掛けに合わせて散布時期を早めてもよい。

②固着性展着剤アビオンEに代えて、K. Kステッカー3,000倍(水100ℓ当り33ml)を使用してもよい。
ただし、最後に混用する。

③エクシレルSEに代えてサムコルフロアブル5,000倍(水100ℓに20ml)を使用してもよい。

◆葉の健全化や光合成能力向上対策について

1. 散布肥料: グリーントップ500倍(100ℓ当り200g)又はリーフマグ1,000倍(100ℓ当り100g)

2. 使用時期: 6月に1～3回

3. 留意事項: 単用散布を推奨するが、定期薬剤散布に混用してもよい。

◆薬害の発生と予防対策について

毎年この時期になると、もも・ネクタリンの落葉の報告があります。薬剤散布に起因しているため、葉の弱いこの時期は下記内容に留意して下さい。

1. 黄変落葉は、薬剤が葉緑素と結合して脱色するもので、通常は薬効が切れれば回復するが樹勢衰弱樹では落葉する。症状は、褐色斑点⇒せん孔⇒落葉となる。

2. 原因

①高濃度での使用(散布) ②乳剤類・展着剤の過剰使用 ③多種類混用

④重複散布 ⑤日照不足時 ⑥高温乾燥時 ⑦樹勢不安定等

3. 散布上での問題点として、タンクの底に薬剤が固まったり、残ることのないようよく溶かす事。
30分以内に乾く条件で散布したい。

◆桃の袋かけについて

1. 袋かけ時期

①肌荒れ、裂果防止のため、目安として、6月上中旬頃とし、遅くとも6月下旬頃には終了させたい。

②生理落果の多い川中島白鳳等は、この頃見直し摘果をし、最後に袋掛けをする。

2. 袋かけの要領: 一度掛けた袋には触れないようにする。

①高い所⇒低い所へ ②奥の方⇒手元の方へ順序よく

3. 注意点

①ガク片(花かす)が着いていると、灰星病や灰色かび病の発生源になるので、ガク片を落として袋かけを行う。

②せん孔細菌病の発生が多い園は、果実感染防止のため、早めに実施する。

◆せん孔細菌病と灰星病の対策を実施しよう！！

1. 感染症状と特徴

- ①6～8月は、本年伸びた新梢に発生をする夏型枝病斑の発生がある。
はじめ紫赤色の病斑だが、広がるにつれて紫黒色になってへこみ、枝に沿って縦長の病斑を形成する。当年の伝染源にはなるため、これも剪除する。
- ②葉での発病は、はじめに葉脈で区切られた不整形の斑点ができ、淡褐色～紫褐色の斑点となり、やがて病斑部分が乾いて抜け落ち、不整形の穴になる。
梅雨期には、葉の発病が増加する。
かなり目立つようであれば、二次伝染が盛んになる。
降雨が続いて、園地内に雨水が長時間残ると、
葉の気孔が開くため、感染が起こり多発生になる。
- ③果実での発病は、幼果ほど感染しやすく、ピンポン玉より大きくなると感染しにくくなる。
幼果の感染後、発病まで2～3週間、ピンポン玉大で40日以上と長くなる。このため、大きくなってから感染すると、有袋栽培では、除袋後でないと発病に気づかない。又は、収穫時に発病しておらず、当年の果実品質に影響が無い場合もある。
なお、収穫時期が遅い品種ほど、多くなる傾向にある。

2. 今後の対策

- ①春型枝病斑の剪除に続いて夏型枝病斑の剪除をする。
切除の際は切り口の形成層を確認し、茶色い筋が見える場合は、更に多めに切除し、再発を防ぐ。
枝病斑にヤニが出ている場合、触らないようにする。触った手は感染防止のため果実に触れないようにする。
- ②袋掛けも果実感染を防ぐ重要な方法。
発生が多い園は、早めに袋掛けを実施する。
- ③薬剤防除は、効果は完全ではないが重要。
当年の果実感染を考えると、袋掛けまでが防除時期。なお、散布量を多くしてしっかり撒く事(特に発生の多い園外周)
- ④排水性の悪い園は、対策を行う。

夏型枝病斑



幼果での発病



葉での発病

